

現代における銘木の存在とその意義の模索

—定義の明確化の試みと銘木商・製作者への聞き取り調査から—

Exploring the existence of precious wood and their significance in modern times

From attempt to clarify definitions and interviews with precious wood owners and creators

岡田（泊里）涼子 武庫川女子大学
生活環境学専攻博士課程

Ryoko Okada (Tomari) Doctoral course student,
Mukogawa Women's University

概要

木を素材とし造形を行う際、製作者は樹種による強度や木理の性質、表面の視覚的な特徴の違いによって、木材を識別し選択をするという工程が必要である。この工程は、造形物の趣旨や性質をも左右するものであり、建築や木工芸などの分野に関わらず、重要視されてきた傾向が感じられる。本研究では、この木材の識別・選択の特徴が顕著にあらわれたものとして銘木の存在があると考えられる。

日本において銘木は、主に和風建築の素材として、生活空間の中の非日常的な空間作りに使用されてきたことが見受けられる。木工芸の分野においても建築分野と同様に、非日常的あるいは鑑賞的な意味合いの強い作品において使用頻度が高かったことがわかる。しかし、近年の生活スタイルや建築様式、人々の嗜好の変化に伴い、需要は減退の一途であるといわれている。銘木は定義が非常に曖昧であり、一般木材との境界が不明瞭であると考えられるが、需要の減退に伴い、存在自体が曖昧なものとなり、銘木の本質や意義も時代や流行によって変容していることが伺える。

本論では、これらの銘木のもつ性質や問題点に着目する。銘木の曖昧さや本質、またそれらの時代による変容の推移を探り、現代における銘木の意義を見出す。第一章において研究の背景と目的を述べ、第二章で既往文献や筆者の木工家としての実体験等をふまえ、銘木の定義を探る。更に第三章において、具体的な銘木の特徴や使用について示し、第四章では、木材全般の消費の動向や人々の木材に対する思考について触れる。また第五章において、筆者が平成28年（2016年）におこなった、銘木商・製作者を対象に銘木に関するアンケートと聞き取り調査の内容と結果を示し、銘木のおかれた環境の実情を把握し、第六章において筆者の考える銘木の定義や、銘木の意義について考察する。

Summary

Before actually using woodwork and woodcraft, designers and creators must first identify and select timber according to the strength of the tree species, the nature of the wood grain, and the visual characteristics of the surface: for these characteristics indelibly impact the tenor and form of the end-

product, be it in architecture or in woodworking. In this paper, we shall study the various aspects of Japanese precious wood (*meiboku*), with the purpose of distinguishing its distinctive features and remarkable qualities.

In Japan, precious wood has been used mainly as material for traditional Japanese-style architecture to decorate an exceptional zone in the dwelling space. Thus, in architecture as well as in woodworking, *meiboku* has been used for extraordinary appreciation and pretentious purposes. But recently, with the decline of preference for the material, demand for precious wood is waning. Definition of precious wood is already becoming vague, and the difference from ordinary wood is increasingly unclear. Along with the decrease in demand, the existence of *meiboku* becomes more and more tenuous, and the pre-eminence and significance attributed to precious wood will likely suffer further changes from times and trends.

In this research, we focus on the properties and present-day problems confronting precious wood. We explore the factors causing ambiguity about quality and define the elusive essence of precious wood; we try to delineate the changes due to social change. In the first chapter we will describe the background and purpose of the research, and in the second chapter we will explore definitions of precious wood based on past literature and our actual experiences as a woodworker. The third chapter details representative *meiboku* features (wood grain texture) and uses, and the fourth chapter discusses general timber consumption trends. In the fifth chapter, we will present the contents and results of the questionnaire and the interview survey conducted in 2016 of woodworkers and precious wood suppliers, in an effort to grasp the actual situation and habitat necessary for the *meiboku*. In the sixth chapter we further discuss the definition and significance of *meiboku* in an era of change.

1. はじめに—研究の背景と目的

木材はいうまでもなく、自然素材である。地球上には約8,000

キーワード：銘木、木材、和風建築、木工芸、杢、床の間

種もの樹種が存在しているというが、気候や風土によって生息種に差異がある。日本は四季による気候の変化や独特な地形が樹木の育成に適していると言われ、約2,200種もの樹種が自生しているとされる¹⁾。人々は太古より樹木を身近に感じ、造形物の材料として使用してきた。

木材は樹種によって、様々な性質を持つ。硬度や耐性、弾力性や軽重など様々な比較、考慮すべき項目があり、更に造形物の性質や使用条件、環境に合わせても重視される項目は違ってくる。そのような項目を比較検討し、造形物に適した木材を選択することは、しばしば適材適所と表現されるが、小原二郎²⁾は、『日本書紀』の神代上の巻において、檜は宮殿に、杉および樟は船に、槇は棺桶に使用すべきという記述があることから、奈良時代においてすでに木材の使い分けの知識が存在していたことを示すものと指摘している。また、安田喜憲³⁾によれば、さらに遡る縄文時代の貝塚の調査によって、丸木舟や櫂、弓などが一定の樹種で製作されていたという。またそれらの樹種の選択は現在と同様のものであり、この時点で樹種の使い分けが確立されていたと考えられる。

このような木材に対する適材適所の判断は、強度や硬度などの様々な科学的根拠に基づく試行錯誤を経て成立したことが推測されるが、美しさや風合い、色合いや木目の模様など、人々の嗜好や感覚的な根拠を優先させていると感じられる造形物も存在し、本研究の対象である銘木は、後者の要素が強いと考える。これらのことから、現代における銘木需要の減少は、人々の木材への意識や嗜好の変化を表しているものと予測し、その変化を探ることを研究目的のひとつとする。

また現代において、銘木は概ね銘木商と呼ばれる専門家により取り扱われ売買されているという認識が一般的である。銘木商を訪れ陳列された木材を観察すると、外観の様子から、一般的な木材との差異を感覚的に認識することは可能であると考えられる。しかしながら、その差異について具体的かつ学術的に示すことに関しては、既往の論述や専門家の意見においても不明瞭であると感じられる。木材は身近な素材であるにも関わらず、銘木と呼ばれる根拠、あるいは定義が非常に曖昧である。また使用例などはもとより、存在そのものの一般的な認知が低いことも問題であると考えられる。このような銘木の特性や使用の推移、実情などを明らかにし、不明瞭で曖昧な銘木の意義の明確化を試みることを本研究の主な目的とする。

2. 銘木とは何か

2-1 言葉の意味から

表記として、名木と銘木の二通りがある。前者は神木や霊木のように、人々の崇拝の対象としての意味合いを持ち、寺社の境内などで祀られていることが多い。後者の銘の字は、素性が明らかで品質の良いことを表す。従って、銘木は上等、上質な木という意味で捉えることができる。またここでの上等、上質とは、伐採し木材として優良であることを指すものと捉えられる。従って本研究の対象は、銘木で表記するものである。

2-2 日本における既存の銘木の定義

他国においてどれほど認識されているか、また出処なども不明ではあるが、世界三大銘木と呼ばれる定義がある。これは、ヨーロッパなどで高級輸入材として人気の高い、マホガニー、チーク、ウォールナットの三樹種のことを指す。この場合の銘木とは、樹種そのものを指す傾向が強い。それぞれの木材は、家具や船舶の内装材などに適した性質を持っているが、非常に高値で取引される為、違法伐採などが相次ぎ、マホガニーとチークに関しては現在、国際法によって規制されている。このことから、木材の質もさることながら、稀少性が重要視されていることが推察される。

これに対して、日本における銘木の定義を検証すると、公益財団法人日本住宅・木材技術センターでは、以下のように示されている⁴⁾。

- (1)材面の鑑賞価値の極めて高いもの (例 柰板, 糸まきの板)
- (2)材の形状が非常に大きいもの (例 大径丸太, 長尺一枚板)
- (3)材の形状が極めてまれなもの (例 サクラツツジ)
- (4)材質がとくに優れているもの (例 木曽ヒノキ)
- (5)類まれな高齢材 (例 イチイ)
- (6)入手がかなり困難な天然木 (例 天然カラマツ)
- (7)類まれな樹種 (例 ビャクダン)
- (8)由緒ある木 (例 春日局櫂)

この定義は、『銘木史』⁵⁾や『銘木集』⁶⁾の本文中にも引用されている。両文献は、銘木の成り立ちや銘木商の歩み、銘木の解説などが章ごとに複数の識者によって述べられており、銘木に関わる専門家の間でも重要視されている。しかしいずれの文献も、銘木の定義づけに関しては困難であるとし、曖昧な表現が見受けられるが、この定義に関しては概ね肯定されていると捉えられる。このことから、日本における銘木の定義として差し障りないものとする。この定義からは樹種そのものよりも材面の様子や形状、樹齢などを条件にあげていることが目立ち、例としていくつかの樹種があがっているものの、特定の樹種に限って示されたものではないことがわかる。また、高齢であることや由緒あるといった、2-1で述べた名木で表記される意味合いを含む項目も見受けられる。

筆者がこれまでに具体的に検証に至ったのは、上記の日本住宅・木材技術センターによる定義のみであり、他の定義の存在とその内容の検証に至ることが今後の研究の課題のひとつと考えている。現時点では、世界三大銘木では、家具や船舶等の素材として最適である、具体的な三種の樹種名があげられており、非常に明解であるのに対し、日本の銘木の定義は、銘木に関する専門的文献内でも述べられているように曖昧であり、銘木の判断に直結しているとは言い難いと考えられる。また、メヒテイル・メルツ⁷⁾は論稿の中で、ヨーロッパ等では、銘木とは高級輸入材のことを指し、日本においては国産材を指すと述べている。このことから、日本の銘木の選択範囲が非常に広いこと

が伺える。

2-3 定義の曖昧さの検証

既往文献から、さらに銘木の定義に関する記述を探ると、『木材工芸用語辞典』⁹⁾や『木竹工芸の事典』⁹⁾などの木工芸に特化した用語集において、銘木を「趣^{おもむき}のある」という表現で言い表されていることが共通してみられる。趣のあるとは、一般的に情緒や風情があり、心惹かれる様子を意味しており、見る者の感覚や嗜好によって判断に違いがあると言えるだろう。

『銘木史』によると¹⁰⁾、第二次世界大戦が勃発した昭和14年(1939年)、軍需用材管理のための用材生産統制規則が発令され、一般木材は生産規制を受けることになったのだが、銘木にあたる木材のみ除外の要望があがったという。その際に、銘木と一般材を区別するための定義を作る必要が生じた。この件に関し、銘木商の鈴木巳之助¹¹⁾は、実際に銘木を取り扱う現場において、銘木の定義を定めたところで、実際の木の鑑別に当たっては大した価値はないと述べている。そして当時定められた定義というものは、今日の銘木業界においてすでに存在していないという。鈴木は、同じ木材を見ても、人によって判断に差が出るため、「目利き」が必要であるとも述べている。つまり、専門家の間では、銘木の判断には木材に関する経験や知識が重要であり、定義を明文化することにはさほど意味がないとする考えがあることが伺い知れる。

以上のような点から概括すると、銘木は一般消費者を隔絶する一面があり、これまでの推移の中で専門性、あるいは独自性が強調され、曖昧さが目立つようになったものと考えられる。

3. 銘木の具体的特徴

3-1 視覚的特徴

表1 杳の種類 (筆者作成 模様形状ごとに分類)

	杳の名称	形状・模様	高頻度見られる樹種
a	玉杳(たまもく)、泡杳(あわもく) 牡丹杳(ぼたんもく)	玉, 円	樺, タモ, 玄圃梨
b	如輪杳(じょりんもく)	鱗	樺
c	渦杳(うずもく)	直線と円	杉
d	舞杳(うずらもく)、雉杳(きじもく)	曼荼羅	屋久杉
e	縞杳(しまもく)	縞	黒檀, 黒柿
f	網杳(あみもく)、孔雀杳(くじゃくもく)	網	黒柿
g	縮杳(ちぢみもく)、縮緬杳(ちりめんもく)	縮れ	栴, 楓, 楠
h	波杳(なみもく)、絵巻杳(えまきもく)	波	樺
i	さば杳(さばもく)	波, 扇	樺
j	瘤杳(こぶもく)、鳥眼杳(ちょうがんもく) 葡萄杳(ぶどうもく)	瘤, 種	花梨, 楓
k	筍杳(たけのこもく)、中杳(なかもく)	円錐	樺, 槐, (中杳) 杉
l	りぼん杳(りぼんもく)、縄目杳(なわめもく)	交錯, 縄目	楠, タブ
m	虎斑杳(とらふもく)、銀杳(ぎんもく)	虎の縞	楡
n	笹杳(ささもく)	笹の葉	杉
o	蟹杳(かにもく)	蟹の脚	松, 梅

前章において、銘木の定義が曖昧であることを繰り返し述べたが、判断基準のひとつとして、視覚的でわかりやすいものと

して杳があげられる。杳とは、樹木の木目、つまり年輪を繊維の縦方向に切断した模様のことを指すが、あえて杳と呼ばれるものは、一般材の木目と比較し、稀少、異質、特異な印象を与えるものであると言える。

銘木に関する文献や実際の調査から認識の出来た杳の名称を、その形状ごとに分類し示す(表1)。杳の名称は、記載のもの以外にも存在する。またaの玉杳(図1)や泡杳のように、違いが明瞭でなく区別の困難なものや、gの縮杳と縮緬杳(図2)、mの虎斑杳と銀杳のように同じ杳で呼び名が複数あるものなどもある。また、fの網杳、孔雀杳(図3)のように、特定の樹種にのみあらわれるものに対し、複数の樹種にあらわれるものもあるが、その場合、樹種によって視覚的な印象が違う場合もある。このように様々な観点から、正確な杳の名称数や分類を示すことは現時点では困難である。



図1 樺材にあらわれた玉杳の様子
(筆者撮影 2017/3)

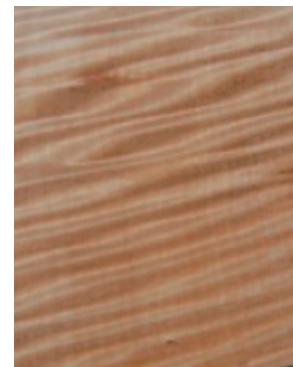


図2 栴材にあらわれた縮杳あるいは縮緬杳
(筆者撮影 2017/3)



図3 黒柿材にあらわれた孔雀杳
(筆者撮影 2017/3)

それぞれの杢は、模様や形状や雰囲気が似ているものから名付けられていることが多いが、厳密な決まりや基準があるわけではない為、銘木商などの専門家の間でも判断に差が出ることもあるという。もとより個体差のある木材は、二つとして全く同じ杢を呈するという事はない。杢の名称は銘木商などの売り手と職人や技術者、あるいは施主などの買い手との間で、木材の視覚的なイメージを伝え合う手段として生み出されたものとする。また、杢の名称には、木材への愛着心や杢を楽しむ遊興性、そして自然物に対する大らかさや柔軟性があらわれていると感じられ、本研究における重要性も高いものとする。

3-2 近年の銘木使用

前項で示した杢板と同様の銘木が、正倉院宝物の木工芸品の用材として使用されていることが見受けられる。第一章でも述べたように、太古より木材を用いて多くの造形物が生産されてきたが、その中で質や見た目の雰囲気、美しさから木材を識別、選択するという知恵や知識が、銘木という概念をうみだすことに繋がったと考える。銘木の概念の形成を探るには、歴史的に遡って検証する必要があるが、本論は、現代における銘木の定義に触れ、意義について考察するものであり、銘木という概念が一般的に定着したのは、明治維新後とされることからも¹²⁾、近年の銘木の使用について示すこととする。

『銘木史』や『銘木集』または『銘木資料集成』¹³⁾といった、銘木に関する文献において、銘木の利用範囲は一般的に、床回り材と数寄屋及び数寄屋建築材であるとする記述が見られる。また、後ほど詳細を述べる、筆者が行ったフィールドワークにおける銘木商の意見でも、銘木を玄関回りや床の間、客間などの用材とする認識が前提として存在していた。そしてそれらの流行として、第二次世界大戦後の復興時から1980年代にかけて、一般家庭における銘木需要が最盛期であったことを、回答者の大半が示していた。かつては寺社仏閣や文化財など、特別な建造物や空間において使用されることが通常であった銘木は、戦後の経済復興に伴い、一般の人々の嗜好対象になっていったことが示唆される。あるいは富の象徴という性質も強くなったといえるだろう。

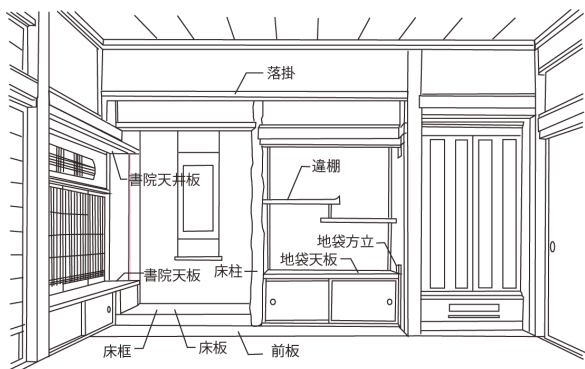


図4 一般住宅内に設置された銘木使用の床の間の取り付け例
(13)を参照、筆者作成)

筆者が行ったフィールドワークにおいて、『銘木資料集成』は多くの銘木商が商品カタログの役割をもつ資料として用いていたことがわかった。『銘木資料集成』内では画像や図を用いて、銘木の取り付け例が多数紹介されている。図4はその中でも、一般住宅における床の間の一例を示す。限られた空間の中に簡易的に、非日常的で特別な場所を設けていた当時の一般住宅の様子が伺い知れる。この一例の詳細を見ると、床板には4.5尺×2尺(約1,363mm×606mm)の樺玉杢板が使用され、価格が27万円と記載されている。また、床框や違い棚などにも同様に樺玉杢が使用されているようで、総額約300万円となっており、一般住宅においても、かなりの高額が費やされ、床の間あるいは銘木が重要視されていたことがわかる。

しかし、昨今では建築様式や生活スタイル、嗜好の変化によって、図4のような空間が減少し、銘木消費に大きな影響を与えている。また、自然環境の変化からも、銘木の供給量が減少していることもあり、かつてのように、寺社仏閣や文化財、あるいは商業施設や飲食店など、特殊な建物や造形物に用いられる傾向に戻っているといえるかもしれない。

4. 木材全般の動向

4-1 木材需給量の推移

銘木の流通や需要、供給の動向を知るために、データの数値から、木材全般の流通の推移を検証する。

表2 木材需給量の推移 単位：千m³
(平成27年度農林水産省木材需給表を参考に筆者作成)

年次	計	総需要量				総供給量	
		製材用材	加工用材			国内生産	輸入
			バルブ・チップ用材	合板用材	その他用材		
昭和35(1960)	71,467	37,789	10,189	3,178	5,391	63,762	7,705
昭和40(1965)	76,798	47,084	14,335	5,187	3,924	56,616	20,182
昭和45(1970)	106,601	62,009	24,887	13,059	2,724	49,780	56,821
昭和48(1973)	121,020	67,470	-	-	-	-	-
昭和50(1975)	99,303	55,341	27,298	11,173	2,557	37,113	62,792
昭和55(1980)	112,211	56,713	35,868	12,840	3,543	36,961	75,250
昭和60(1985)	95,447	44,539	32,915	11,217	4,230	35,374	60,073
平成2(1990)	113,242	53,887	41,344	14,546	1,385	31,297	81,945
平成8(1996)	114,217	49,758	44,922	15,726	3,196	23,770	90,447
平成12(2000)	101,006	40,946	42,186	13,825	3,196	19,058	81,948
平成17(2005)	87,423	32,901	37,608	12,586	2,763	17,899	69,523
平成22(2010)	71,884	25,379	32,350	9,556	2,968	18,923	52,961
平成27(2015)	75,160	25,358	31,783	9,914	3,829	24,918	50,242

現在の木材の流通形態は、大きく無垢材と加工木材にわけられる。無垢材は丸太から板や角材などを製材しただけのものを指し、加工木材は丸太から薄板や小さな角材、あるいはチップ状や粉状にまで加工したものを、接着剤などで再び板や角材の形状にまで貼り合わせたものを指す。例えば合板や集成材、ファイバーボードやパーティクルボードなどと呼ばれるものがそれにあたり、木材の性質を残したものから、ほとんど性質を離れたものまで多種にわたる。近年では、人々の生活スタイルや環境の変化によって、時間やコストが膨大にかかる自然素材に対し、量産が可能で均一的な新しい加工木材の開発が積極的に行われている。今日の生活環境においてはむしろ、これらの新しい素材が使用されていることの方が一般的であると言えるかもしれない。

表2は1960年（昭和35年）から2015年（平成27）年までの日本の木材需要量の推移をあらわしている。このデータ内に銘木という区分は見られず、いずれに属するかも不明であるが、筆者は製材用材に含まれるものとする。木材全般の総需要量は、戦後の復興期と高度経済成長期の経済発展により増加を続け、1973年（昭和48年）に最高値となっている。その後、オイルショックやバブル景気崩壊などの影響により、1996年（平成8年）以降は減少傾向にあったが、近年はやや持ち直している様子もみられる。総需要量に対する、製材用材と加工用材の割合を比較すれば、加工用材の需要率が上がっており、木材使用の性質の変化が伺い知れる。また、総供給量において、1960年代後半（昭和40年代前半）に国産材を輸入材が上回った後、自給率が下降を続けていたが、2002年（平成14年）以降は回復傾向にある。表2の数値的な変化は、筆者が行ったフィールドワークにおいて多く聞かれた、戦後復興期の住宅建設量の高まりに伴い、木材や銘木の需要量が最盛期をむかえたことや、その後の景気悪化、建築様式の変化によって需要の減少が続いているという知見に一致している。

4-2 木材の広義化

このような状況を概観すると、木材の概念が広義化しており、人々の木材に対する意識に変化が生じていることがみえてくる。習得に時間を要する技術や知識は不要となり、自然環境や人々の価値観などから考慮しても、無垢材や銘木を使用することは、合理性の観点から捉えれば、時代の流れに即していない一面があると思われる。

しかし一方で、現在の生活空間の中で、プラスチックなどの異素材に木目を印刷した、プリント合板と呼ばれるものが多く見受けられる。壁紙や布地、スマートフォンやタブレットなどの電子機器のカバーにまで、木目がプリントされた製品を目にする。科学的に分析し明示することは困難であるが、人間の感覚に対し木目が何らかの効果を与えており、現代の人々の内にも、無意識に木を求める心理が存在することのあらわれではないかと考える。

5. 銘木の実情

5-1 銘木、木材に関するアンケート調査

現代の銘木の市場の様子や、銘木消費の動向を把握することを目的に、銘木商と木工家や大工などの作り手に向けたアンケート調査を行った。アンケートの内容は以下の通りである。

実施期間：平成28年（2016年）8月～9月

対象者：A 銘木商、材木商...200件

(兵庫県、大阪府、京都府、奈良県、岐阜県、東京都、岡山県のweb上の電話帳「iタウンページ」にて“銘木商”で検索)

B 木工家、木工芸家、建築関係者...157件

(木工家ネットワーク登録者)

方法：郵送によるアンケート用紙の送付

回答数：A 49件 B 37件

質問内容：①所属する企業、店舗、または個人について
(経歴、回答者の年齢、職歴等)

②主な取扱い材種(銘木、一般材、無垢材、合板等)

③主な取扱い樹種

④木材の仕入れについて(経路、場所、方法等)

⑤木材(商品、作品)の販売先について

⑥近年の木材消費傾向について

⑦木材消費の推移について(以前と近年の比較)

⑧銘木と一般材の相違点とは

⑨銘木に対する意識、思い

⑩インタビュー対応の可否

⑪回答者の連絡先(メールアドレス等)

⑫銘木に関する情報、アドバイス

対象者はAグループを銘木商、材木商とし、筆者の活動圏内と、規模の大きい銘木市場を有する東京都、岐阜県を加えた都道府県に限定した。Bグループは木材を主な材料とする製作者を対象とした。主催者の協力を得て、木工家ネットワーク登録者の内、実製作を伴うと考えられる業種から選出した。有効回答数はAグループで49件、Bグループで37件であった。尚、質問は12項目を設定し、全て自由記述の形式とした。

まず、Aグループにおける銘木業界は現在、需要供給ともに減少しており、銘木商の廃業や後継者不足等、低迷期を迎えているようである。銘木商店の多くは昭和20年代に開業し、昭和30年代から40年代に売り上げが最盛期を迎え、その後衰退している。回答者の多くが50代以上、最高齢は91歳と高齢化が目立った。回答の多くから、銘木業界の衰退傾向の理由として、プレカット工法¹⁰⁾の出現や建築様式の変化による、銘木需要の減少をあげる意見がみられた。また、定義に繋がる、銘木と一般材との違いについての質問には、第二章であげた日本住宅・木材技術センターによる定義に類似した回答が多く見られた。さらに、銘木を「品格のあるもの」「畏敬の念をもつもの」「日本の文化」など、肯定あるいは賞賛し、単なる商品以上の感情を持つことがうかがえる表現も多く見られた。

次に、製作者であるBグループの回答においては、回答数37件のなかで、銘木の利用率は2割にも満たなかった。使用しない理由としては、銘木が高額であることや、自身のデザイン性に適していないことがあげられた。定義については、Aグループと同様の意見も多く見られたが、「既存の価値観が新しい創造の邪魔である」「金持ちの道楽というイメージ」といった否定的な意見も多いことが印象に残った。仕事の性質にもよるが、Bグループ全体として、興味・関心自体が低いように感じられた。

5-2 銘木商、材木商への訪問、インタビュー

アンケート調査に伴い、銘木商、材木商への訪問、インタビューを実施した。内容は以下の7件である。

- ①日時：平成28年9月9日 場所：兵庫県姫路市 S木材商
回答者：S氏（代表取締役）
- ②日時：平成28年11月5日 場所：奈良県吉野郡 株式会社T銘木
回答者：T氏（代表取締役）
- ③日時：平成28年11月5日 場所：奈良県吉野郡 K銘木店自宅
回答者：K氏（店主）
- ④日時：平成28年11月5日 場所：奈良県吉野郡 株式会社S
案内者：S氏
- ⑤日時：平成28年11月9日 場所：兵庫県養父市 八鹿木材市場
案内者：H氏（木材商店主）
- ⑥日時：平成28年11月9日 場所：兵庫県養父市 八鹿木材市場
回答者：S氏（八鹿木材市場 代表取締役）
- ⑦日時：平成28年11月11日
場所：大阪府摂津市鳥飼銘木町 株式会社Y銘木
回答者：Y氏（代表取締役）

回答者の年齢層は50代から80代にわたる。会社または商店の規模は、④⑥が従業員10名以上の大規模、②が従業員10名以下、①③⑤⑦は家族経営、あるいは店主のみで経営する店舗形態であった。②④以外の回答者において、銘木あるいは木材業界の縮小や銘木需要量の低下を憂う意見が聞かれた。先にも述べたように、戦後から1980年代にかけてピークを迎えた銘木需要が近年激減しているということである。⑦はいわゆる銘木団地と呼ばれる、銘木商ばかりが集まった地域の中にあつた。昭和30年代に120件あまりが軒を連ねていたが、現在では20件ほどを残しシャッター街と化している。さらに残りの20件も、商売替えなどを行っている商店も少なくないということである。

②は磨き丸太などを主に扱っているが、近年では海外からの問い合わせやアート分野などでの細かい需要に対応しているということである。④は集成材に銘木の突板を貼り合わせる化粧柱の製造を行っており、最近の木造住宅人気の復活傾向や、国産材志向の高まりなどに伴い、売れ行きは好調であるという。広い工場内で多くの従業員が作業をしていた。

定義に関する問いの印象的な答えとして、「銘木に定義はない、というのが定義である」というものがあつた。また、磨き丸太や化粧柱などの人工的な銘木の存在と、それに対する様々な視点や思考の違いが存在することにも気付かされた。

6. 考察

第一章から第五章まで、現代における銘木の存在とその意義について様々な視点から考察してきた。第二章において、既存の銘木の定義についてあげた。この定義に関しては、銘木に関する文献や、実際に銘木を取り扱う銘木商のなかでも、概ね適当と判断されていることがわかった。しかしながら、銘木を床の間回りの和風建築材料とする前提が大きく、時代の様式や流行の変化、造形の分野に左右されない、普遍的な銘木の本質を追求する必要性を感じる。

そこで筆者がこれまでに得た知識や情報から導き出した銘木

の判断基準として①木理（繊維）が緻密、②杻が出ている、③艶がある、④木肌がなめらかである、⑤狂いが少ない、という条件をあげる。全てを満たすのではなく、いずれかが当てはまることを判断の目安としてあげている。概観すると銘木は、製作者にとっても優良な木材と捉えて差し障りないものと考えられる。素材の見極めは技の習得以上に重要であるという意見も存在することから、造形物に適した素材を選出し、それらを入力する手段を得ることは大きな課題である。しかし、今回のフィールドワークから、2-3で触れた銘木、あるいは銘木業界と一般消費者との隔絶は、製作者との間にも生じているように感じられた。時代や流行が変化しようと、銘木の本質は不変である。しかし、現代における多くの造形にとって、必ずしも銘木とされるものが優良な木材であるとは言えないことが浮き彫りになり、素材への認識の変化が生じていることは明らかである。

銘木の概念からは、人と自然の良好な関係性が感じられ、自然環境の悪化が懸念される今日においてむしろ見直されるべきものではないかとも考える。最近の銘木離れが進んでいる現状を単なる流行や嗜好の変化に因るものとせず、様々な視点から調査、追及することが今後の大きな課題と考える。建築材としてだけでなく、工芸用材としてなど多角的に分析し、概念の成立や銘木を活かした造形について知識を深めることも同様と考える。本研究を通して、現代あるいは将来的な銘木の使用、または銘木の意義をあきらかにし、人と素材との関係性について考えるきっかけのひとつを導き出せるものと感じている。

注および参考文献

- 1) 鈴木啓三：木の国ニッポン，グラフ社，2008
- 2) 小原二郎：木の文化，鹿島研究所出版会，1972
- 3) 安田喜憲：環境考古学事始，日本放送出版協会，NHKブックス365，1980
- 4) 公益財団法人 日本住宅・木材技術センター ホームページ，
<http://www.howtec.or.jp/> (2017/6/16)
- 5) 銘木史編集委員会 編：銘木史，全国銘木連合会，1986
- 6) 中村昌生：銘木集，小学館，数寄屋建築集成第9巻，1985
- 7) メヒティル・メルツ，林裕美子 訳，日本の木と伝統木工芸，青海社，2016
- 8) 成田寿一郎：木材工芸用語辞典，理工学社，240，1976
- 9) 柳宗理，渋谷貞，内堀繁生編，木竹工芸の事典，朝倉書店，34-37，1986
- 10) 5) p.62
- 11) 鈴木巳之助：銘木の味，林材新聞社出版局，1973
- 12) 5) p.49
- 13) 全国銘木青年連合会編：銘木資料集成—銘木その美とこころ，和風建築社，1986
- 14) プレカット工法，従来手作業で行われていた造作を，コンピュータ制御の機械によって工場内であらかじめ木材を加工しておくこと。